

歩けた！手が動いた

あるビジネスマンの脳卒中リハビリ成功記

元旭化成工業株式会社 札幌支社長

森山志郎

目次

第一章 発病と入院	7
不幸は突然にやってきた	8
それは足の痛みから始まった	入院の夜、手足が動かなくなる
脳梗塞と診断されて	〈そのとき妻は〉
右半身マヒという現実	17
新聞紙がつまめない	やっと訓練を始める
〈そのとき妻は〉	再び「絶対安静」に
本格的なりハビリを始めて	28
「寝たきりになりたいのか！」	車椅子を捨てるために
リハビリに「地獄」を見た	再び立ち上がって
〈そのとき妻は〉	〈そのとき妻は〉
退院・元の職場に戻れず	41
厳しい妻の励まし	職場復帰を夢みる
〈そのとき妻は〉	閑職への辞令、そして退院

第二章 退院一年目の試行錯誤

日常生活は自分でこなしたい

52

退院当初の訓練状況 発病前の生活をふり返って
杖を持たずに歩けた 退院後初めて旅をする

〈そのとき妻は〉

退院一年後のうれしい事件

66

十三カ月ぶりに歌を歌う 好きこそもののじょうずなれ
左手だけで写真が撮れた

〈そのとき妻は〉

私の歩行訓練

73

寒さを迎えての暮らし 着替えに一苦労する 毎日ひたすら歩く
手足に命令が届かない 初詣で玉砂利道に挑む 念ずれば花ひびく

〈そのとき妻は〉

第三章 リハビリへの新たなチャレンジ

91

同病の仲間と出会って

92

リハビリ教室への参加 右手で字が書けた！ 痛くなければリハビリでは
ない しゃべれない、歌えない 風邪（ふうぜい）が（か）る（か）ら（な）い 東（あづま）

〈そのとき妻は〉

「仲間」から教えられたこと

104

リハビリの大切は心が萎えること 仏の手とお化けの手と

〈そのとき妻は〉

私のリハビリ・アイディア

119

写真集を出版する 写真集の中芯で手指の訓練
写経に挑戦して得たもの イメージを描いて訓練をする
夢の中でクラブを振る 白球が空を飛んだ日

〈そのとき妻は〉

第四章 職場を去って思うこと

141

何かが見えてきた

142

死を思った日々 復職を断念する
残りの「いのち」を考える 田宮虎彦氏の死に思う

〈そのとき妻は〉

新しい森山志郎の誕生

155

回復の歩みは遅い 甘えはなかったか 私の青春賛歌
私の世界が変わる

〈そのとき妻は〉

第五章 障害とともに生きる

私の仕事を発見する

旧友と学徒動員時代の記録作り 写真個展を開く
「あゆみの会」記念号のこと 〈そのとき妻は〉

172

遅い歩みの中から新しい能力も

国東の仏・三百五十の石段を登る 〈そのとき妻は〉
新たな目標へリハビリ五カ条 右手でお箸が持てた
その後のカメラマンぶり 左手で隷書に挑戦 未知の能力の発見
〈そのとき妻は〉

187

六年目の暮らしぶり

洗顔・身だしなみ・食事など ネクタイが結べた
家事や入浴もじょうずに利用すると 〈そのとき妻は〉

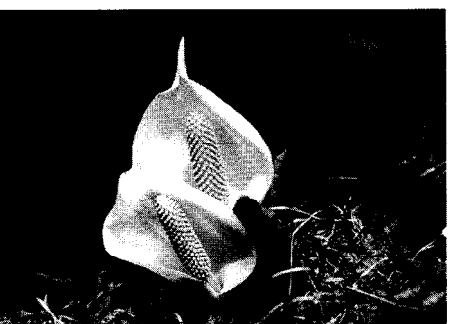
210

あとがき

222

各章の扉写真は著者の写真集『愛しの大地』より

第一章 発病と入院



不幸は突然にやってきた

昭和五十六年の初夏、私は東京の職場（旭エンジニアリング営業部）から旭化成工業の札幌支社長として、初めての北海道に喜び勇んで赴任した。九州に生まれ九州で成人した私は、九州以外では東京近郊と三重県しか知らず、まだ見ぬ大自然の恵みにあふれる北海道の生活に夢を馳せ、心は踊っていたのである。当時すでに、横浜に自宅を建てていたので、とりあえず私だけ赴任し、妻は札幌と横浜を行き来する生活に入った。

支社長の仕事は、あるときは楽しく、あるときは緊張を伴うものであった。北海道も札幌は近代的だが、東部の海岸や北部の山岳地帯に行くと、北きつねが大きなしっぽを振りながら近づいてくる。当時は、日本産業高度化の波に乗り遅れた北海道が、相も変わらぬ農林・水産・鉱業から、なんとか脱皮できないかともがいていた時期であり、私の経験が役に立ちそうな状況にあった。私は大いに張り切って仕事をした。

昭和五十九年末に、私は五十五歳で定年になったが、「北海道未来総合研究所」というシンクタンクができ、これを手伝おうと、会社には定年の延長をお願いして北海道に留まった。

それは足の痛みから始まった

昭和六十年の春ごろ、会社の技術陣が開発した人工皮革の新しい用途はないかと考えるうちに、寒冷積雪の北海道なら、東京や大阪と異なった用途の開発があるかもしれぬ、じゃあ一度人工皮革の新製品展示会を札幌でやってみるか、ということになった。四年の間にできた数々の人間関係を軸にして招待状二千枚を発送した。

市内の中心にあるホテルの一室を借りて、明日からの展示会の準備が完了したのを確認したのは、九月十日の夜だった。

いつも健康管理上、家へは歩いて帰るのだが、その日、私は住まいの近くにきて、路面電車のレールに足をつっかけた。それまでに一度も経験しなかったことである。「おかしいな、少し足が疲れたのかな」と思いつつ帰宅し、妻に状況を話したが、「一晩寝たら治るんじゃない、少し夏の疲れが出たのかしら」と深く気にも留めない様子だった。

九月十一日の朝、出勤するときに、足の痛みが尋常ではないことに気づいた。かかとの芯に疼痛があるとも言ったらよいだろうか。しかし、今日はたくさんの招待客を案内している初日である。

そんなときに、「足が痛いから休みました」なんて弱音が吐けるか。

タクシーを拾って会場に行き、緊張しながら初日の幕開けをした。会場には多くの招待客が次々に顔を出してくださり、質問や称賛の言葉がつづく。夢中になりながらも、足の痛みは次第に激しくな

り、ついにかかとを地面につけることも無理な状況になってきた。昼にはホテルの二階で催された札幌ロータリークラブの例会に出席したが、足の痛みで食事もなくにのどを通らなかつた。午後に入って人の波も一息ついたころ、私と同じ九州のご出身で、ご夫妻ともにおつきあいのある千歳市の議員市川夫妻が見えた。奥さまは若いころに九州大学で看護婦としての教育と訓練を受けた方であった。私が痛みを耐えながら挨拶すると、奥さまは私の顔をうかがうようにのぞき込みながら表情も固く、「森山さん、病院に行きましよう」といきなり言われた。

「はい、展示会がすんだら来週にでも病院に行ってみるつもりです」

「いえ、それではだめです。大事な命にかかわることで時間が問題なのです。急いでください」

さすがに私もびつくりして会社の健康管理医に電話し、直ちにその病院に車を走らせた。午後二時少し前だった。平素から私の健康を診ている先生は、私の様子を観察して、「一つ二つ質問をするなり、院長に電話しておきますから、すぐに脳外科専門の中村記念病院に行ってください」と宣告した。

中村記念病院では次々に検査が行われたが、その間にも次第に自分の足で立てなくなってきた。車椅子の助けを借りなければならなくなつた。そのころになって、ようやく連絡のとれた妻が心配に表情をひきつらせて駆けつけてきた。

「すぐ、入院してください」

そんな声がどこかでしていた。

入院の夜、手足が動かなくなる

入院した私は、ベッドでただ眠っていた。

ときどき意識が戻ると、ベッドの上にはたたくさんの点滴のびんが天井からぶら下がっているのが見えた。夜中に看護婦が私を起こして、「お名前は」、「百から三を引くと幾つ？」などと質問する。眠りを中断された私は不機嫌になつて、「うるさいっ」と答えていた。その夜、何時間寝たのか、ベッドで目覚めると、私の右手は動かなくなりつつあつた。

「おい、少しずつ動かなくなつたよ」と妻に伝えたが、妻は先刻承知していたらしい。でも、やはり悲しかったに違いない。そしてまた私の意識はなくなつた。

一夜が明けた。大勢の医師が回診に来ていろいろと質問する。気がつくると天井につるされている点滴のびんが倍に増えて、私の腕と太腿には注射器が固定され、常時体内に薬液が注入されていた。そのうちに今度は、右足の筋肉が収斂して内側に湾曲する感じがしてきた。「俺は手も足も使えなくなるのか、この病院にこのまま入院していてもだいじょうぶかな」と思いつつ私はまた眠つた。

夢の中だった。母の懐かしい声が聞こえる。

「志郎、志郎は今のままでいいからしっかり治療するんだよ。来るのはまだ早いよ、ねえ、お父さん」

ふすまの奥から父の声が聞こえた。

「ああ、そうだ、お前はすっかりそこで治療するんだ」

「志郎、わかったか」

両親の声は生きていたところと全く同じだった。夢から覚めた私は、両親がすっかり私を見ていくれるという確信を持った。

脳梗塞と診断されて

入院したその日に、妻は脳梗塞だと教えられたという。運よく病気が治っても体の半分がマヒの後遺症に冒され、正常な社会生活が阻害される大変な病気らしい。それまで、私はこんな病気になるとは全く予想もしていなかった。おそらく、脳血管障害に襲われた人は、だれ一人として予想していなかったに違いない。だれの場合も「ある日突然に」病気が襲ってきている点は、不慮の交通事故と似ている。

私の同僚で、元気だったある課長は、東京から広島に出張して、宿泊中のホテルで突然意識を失って入院し、頸動脈の血栓による脳梗塞と診断された。また、後で聞いた話だが、入院中の患者仲間から「頑張り屋の社長さん」と言われていたAさんは、部下の先頭に立って頑張り人で、その日も元気に夜遅くまで残業し、社員を帰した後で倒れ、翌朝出勤してきた社員に発見されて病院に運ばれたという。脳血管の破裂であった。

田中元総理はコンピューターつきブルドーザーといわれながらも、度重なる心労のためか、晩酌の杯を取り落とし、あわてて入院し、脳血管障害による半身不随のまま引退を余儀なくされた。

私の場合も、なぜあのと同時に発病したのかは後になってもわからなかった。前兆は足の痛みだけ、その足の痛みと脳梗塞がどうつながっていたのか、医師からも答えは得られなかった。

それはさておき、突然のでき事に出会った私たちに共通するのは、心の準備が何一つできていないということである。

私たちのそれまでの生活の中には、障害者として生きる心構えは全くなく、本人も家族も、ただオロオロするばかりなのである。



札幌在住のビジネスマン同士の親睦会で。当時(昭和60年ごろ)は、こうした遊びの場も仕事の一部にして飛び回っていた(右から3人目著者)。

あの日、午後二時半ごろ、出先から戻り、マンションのエレベーターを降りると、自室から狂ったように鳴る電話のベルが聞こえてきました。

「支社長がたいへんです。すぐ……」

人間というのは、あまり思いがけないことを聞くと、一瞬、なんの感慨もわかないものなのでしょう。後になって、あのときの気持ちを思い出そうとしても一向に思い出せません。とるものもとりあえずタクシーを病院に走らせながら、信号にばかりひっかかっていたような気がし、とりとめなくあれこれ考えたことだけが思い出されます。

足が痛いと言っていたこと、午前中、会場に顔を出したとき、ちょっと元気がなかったかなと思ったこと、血圧は高くなかったのに……

病院に着くと、夫は検査室の前で車椅子に乗っていました。

「どうしたの」と言うのと、「うん、足が痛くておかしいんだ」と答える夫は、少し顔色は赤いものの、さして変わったようには見えません。

しかし、脳波検査の結果、即入院となり、私もそのままベッドサイドで一夜を明かすことになりました。もつとも夫は入院をいやがり、「帰ろう」と言って、周囲になだめられてようやく入院を納得したのでした。

医師に呼ばれ、「ご主人は左脳の脳梗塞ですが、まだ進行が続いているの

で、どうなるかわかりません。右半身のマヒは避けられないでしょう」と告げられました。

事の重大さが次第に心に重くのしかかってきます。

病院関係者に知人のいない札幌での突然の入院は、とても不安なことです。そこで私はすぐ、九州の身内のお医者さまに電話して、病状とこちらの病院の体制を知らせて相談しました。「お医者さまを信じて任せなさい。そんな病院ならだいじょうぶですよ」との返事に、ようやくおちつくことができましたが、友人や身内の医師が側にいないということは、やはり心細いものでした。

夜中になると、夫は「手が動かなくなった」と言いました。ついにくるものがきたのか、と背筋に冷たいものを感じましたが、突然のことなので、何がどうなっていくのかわかりません。

「明日になったら治っているかもしれない」とつぶやき、心に念じながら、夫の手を両手でしっかり挟んでいました。手を放し、目をそらしたら、そのすきにみんなマヒしてしまいそうな気がしたのです。

これは後日、病院の中で聞いた話ですが、大きい病院で診察を受けた人の中には、内科の検査に始まり、順次各科を回されて、ようやく三日目に脳血管の障害と診断された人もいたそうです。それを思うと夫は運がよかったですと思います。

右半身マヒという現実

入院翌日から治療は着実に進められていった。九月いっぱい点滴治療で、天井には常時六、七本のびんがぶら下がっていた。同時に高圧酸素治療が行われた。

高圧酸素治療とは、梗塞で酸素欠乏を起こした脳細胞に、外から圧力を高めた酸素を送り込むという、言ってみれば「原始的」な治療法である。

数人の屈強な人が寝たままの重たい私を、ベッドから抱え上げ、寝台輸送車に移して運んでくれる。次いで鋼鉄製の棺桶を思わせるタンクに入れられ、高圧酸素の治療を受けるのである。寝台輸送車から抱えられて、このタンクに入れられるときは、再び生きて出られるのかなあと、不安な気持ちがかすめた。タンクの中では、次第に圧力が変化してくるにつれて、頭がワンワンしてくる。力を込めて唾液を飲み込むが、一度や二度では耳の痛みは治らない。やがてあめ玉をしゃぶっていると同様になることを発見してからは、いつもあめ玉をそつと忍ばせて入った。ときにはタンクの中で失禁する人がいるのであろうか。異臭が鼻をつくこともあった。

高圧の酸素が充満しているところで静電気の事故があったら、あつという間もないだろうとぼんや

り考えて、一刻も早くタンクから出してもらえることを願った。

第一回の高圧酸素治療は、十日間くらい続いて終わったが、しばらくしてから、回復状況が思わしくなかったのか、もう一度、今度は一週間くらいの治療が行われた。回診時には主治医が「足を上げて」、「腕を上げて」といった「機能検査」も行なった。

新聞紙がつまめない

そんな日々、私の心の中では楽観主義と悲観主義が互いに攻め合っていた。楽観主義が強いときには、「大変な病気になったなあ。しかし雪が降るまでには退院して復帰できるだろう。せっかく北海道の秋を楽しんで旅行しようと計画していたのに残念だったな。でも退院したら、また出かけるか」と思う。あまりにも強い衝撃に出会って、私には自分のことが客観的には何一つ見えてこないのである。すべてを希望的に、楽観的に考えながら、絶望に陥らないよう必死に抵抗を続ける。

しかし、悲観主義が頭を持ち上げてくると、目の前が真っ暗になり、私の未来がいつかい吹き飛ばす感じになる。底知れぬ深い穴に突き落とされて、どうやってはい上がればよいのかと思惑う。社会的な活力を失ったら、死刑の宣告を受けたも同然だな、と考え込む。

ふと目を外にやると、窓枠の周囲には転落防止の金網が張ってある。きっと自殺した人がいたんだろう。自殺の誘惑が脳裏をかすめる。そして私は、昨日まで大勢の人と談笑し、スポーツを楽しんでいたのに突然、動くこともしゃべることもできなくなり、病院のベッドで昼夜にわたり点滴を受け、

高圧酸素治療のタンクに入れられている。

それでも、やがて容体が安定してきて、寝台輸送車の世話にならずに車椅子で移動することができるようになった。外の風景はいつしか紅葉が過ぎ、雪虫の舞う季節に移り変わっていたが、楽観主義とは程遠い状態で、私の病状は少しも改善されなかった。次第に気分は暗く絶望的になり、焦ってくる。試みに新聞紙を指で挟んでみたが、スルリと落ちる。

「おかしいな、新聞紙一枚つまめない」

これが自分の現実として把握されたとき、初めて将来が気になり始めた。「私の人生は？ 家族は？ 仕事は？ 退院後の生活は？」といった問題が雲のようにわき上がり、不安に包まれてしまう。

それまでに何度となく切り抜けてきた難関も、今度のように会社員としての生活基盤自体を揺るがせるほどの災難不幸ではなかった。今までのせっかくの努力もすべて水の泡と消えるのか。

それまで想像すらしていなかった状況、即ち、障害者になった私が生きる方法など、あるのだろうか。妻と子供とローンを抱えて、しかも働けなくなったらどうするんだ。自分の立っている地盤が抜け落ちるような破局の瀬戸際に追い詰められて、私はただ呆然とするしかなかった。

「私はこの世では、もう必要でなくなっただろうか」

「私の人生はこれで終わったのだろうか」

これまでの長い人生を支えてきた私の人生観には、社会のために働くという言葉はあったが、「感動

を大事にしたり美しいものに心を寄せる人生」などという言葉はなかった。今までの人生観の基本にある「価値観」で、手も使えない、足も動かないという現在の自分を計ると、私には何も値打ちがないように思えた。

そのころの私には、積極的に生きてきたこれまでとは違った「価値観」をつくり上げようという考えは浮かんでこなかったのである。突然の嵐になぎ倒され、吹き飛ばされた結果、この肉体をどうやって立ち上がらせたいのか、大事な精神活動がすべて停止され、ただぼんやりとして、片肘ついて立ち上がることをすら思いつかない最悪の状態がつづく。

やっと訓練を始める

二、三週間がたつて、車椅子で病院の廊下を少し動くことができるようになったころ、主治医から、「右手の回復は時間がかかるし、なかなかむずかしいから、左手で文字を書く練習をしておいたほうがいいですね」と忠告をされた。

私は素直に、「そうですね、しかたないな」と妻に早速、低学年用の国語ノートを買ってきてもらって、毎日左手で文字を書く練習をした。左手を私のよき伴侶とすべく必死になって、その活性化に努めた。それからは先輩や仲間がどうやってしているか、私にいちばんよい方法は何かと周辺を見渡す日が続いた。

急性期の病状が安定すると、四階の病室から十三階の眺めのいい病室に移された。十月に入り、よ

うやく「起立訓練」が開始された。

十月末日には、天井につり下げた二本の滑車につながれた一本のつり輪つきロープを、左右交互に引つ張る滑車訓練作業で、右腕で滑車を引くことができた。また、車椅子に座ったまま右足に縛りつけた、重りのついたロープを後ろまで引く運動ができるようになり、機能は順調に回復し始めたようだった。

病院の生活に慣れるにしたがつて、すっかり病人らしくなり、車椅子の操作もじょうずになった。無理に筋肉を動かさねば痛むところもない。私の右手は強い拘縮で「く」の字に曲がり、左の胸にくっついている。足は動かないから、車椅子に頼った。退院後は車椅子が身辺から離せなくなると思い、「家をどんなふうに変更したらいいかな」と妻と話し、妻は、市内のデパートに新式の車椅子を見に行き、研究を重ねていた。

朝の起床とともに生活のすべては機能の回復に向けられた。

毎日のトレーニングは指定された時間内は訓練室で行い、「気泡浴」で全身マッサージをした後は、廊下や階段の踊り場の手すりを使って、固くこわばった股とか膝の関節を屈伸させる体操に汗を流した。固い関節は、動かすことにバリバリと音を立てるのではないかと思うほど動きにくくなっていたし、動かせば痛みも伴った。

トイレまでの短い距離は妻の肩にすがれば自分の足で行けるようになった。このころになると、ようやく回復に向けて私のエンジンが回転を始め、深い穴蔵から脱出できそうな希望を感じるようになって

っていた。

「もうすぐ復帰できる、また活動ができる」心は弾んできた。しかし妻の目には、「あまり訓練をしなくなった」、「少し疲れがみだ」と映っていたようだ。たぶん、気づかない疲れが出てきていたのではなかっただろうか。

そして、ここで私は夢にも思わなかった災害の追い打ちに襲われたのである。

再び「絶対安静」に

十月三十日、朝の回診に見えた主治医が検査室からの血液検査報告を見ると、顔から笑みを消した。「森山さん、肝臓が少しよくないね。しばらくリハビリ訓練と気泡浴を中止してください。そして絶対安静にしてください」

一度落とされた深い穴から脱出する希望を持った瞬間、再び穴の底にけ落とされた思いだった。突然の発病とそれに続く後遺症、この後遺症の苦しみから必死に脱出しようとする私の頭に、また一つ、げんこつをくらったのだ。そのときの絶望的な気分は思い出すさえつらい。

絶対安静と点滴の治療が終わって、ようやくリハビリが再開できるようになったのは、十一月二十二日、三週間後のことだった。

体調と相談しながらも、歩行訓練に力を入れようとして起き上がった私は、体の変化に驚いた。私

の大きな筋肉は腕も腿も臀部もすっかり落ちていたのだ。この三週間の絶対安静の間に、筋肉という筋肉は、すべて、溶けて流れ出し、脇腹には余ってしまった皮膚がぶらんと垂れ下がる状態になり、臀部の筋肉は鋭い刃物でそぎ落とすように削られていた。

さらに自分の力でマヒの手足を動かそうとすると、筋肉や関節の激しい痛みが襲いかかってきた。その痛みは再び私の心をふるえ上がらせて気持ちをいちだんと沈み込ませてしまった。しかも、どんなに努力しても、私の手足には一向に私の意思が通じない。

腹の底からやり場のない激しい怒りが込み上げてきた。突然、ベッドの側にあった杖を取り上げたが、何にこの怒りをぶつけてよいかわからない。しかし何かにこの怒りを投げつけなければならぬ。私は自分のベッドの布団に向かってその杖を激しく打ち下ろした。

「むーっ、うーっ、むーっ、このっ」

何度も何度も言葉にならないうめき声を上げて杖でたたいた。たたきにたたいた。何度も何度もたたいた。丈夫な杖が曲がってしまうまで打ちつづけた。

妻は部屋の隅で、そんな荒れ狂う私を止めることもできず、ただ悲しげな顔で見詰めるだけだった。熱い涙が両眼からあふれた。止めようとしても止まらない熱い涙が流れ続けた。泣けるだけ泣いた私は、かえって気持ちが静かになってきた。

絶対安静の厳しさは身にしみたが、病院の中には私同様、張り切りすぎて肝臓を痛め、泣く泣く絶

対安静をしている仲間が何人もいることがわかった。やはり少し焦りがある人たちである。社会復帰を一口も早くと焦る患者が、次々にこの肝臓障害でやむをえずリハビリを中断している。

「肝臓障害に陥りやすいので、リハビリのしすぎによる過労は厳禁である」

という注意が一言あつたらと、くやしい思いをした。

しかし、私はもう一度失敗を繰り返してしまった。訓練の再開を喜び、遅れを取り戻そうと訓練に励むうち、肩に大変な痛みが襲ってきたのである。訓練再開の四日目、あまりの痛みで診断してもらうと、肩が「亜脱臼」を起こしていることがわかった。

「三角巾で腕をつって肩の運動は中止しなさい」

と言われた。同病の仲間の一人は「手術の必要あり」と診断されて涙していた。私の場合は、再三にわたり整形外科医が診察した結果「手術の要なし」となったが、同時に右手の訓練はそこで停止せざるをえなかった。

肩を亜脱臼して以来というものは、腕を動かすだけで飛び上がるほど痛むので、なるべく動かさないうようにじっとしていた。殊に右上腕の拘縮は強く、少し動かしただけでも筋肉層の中の部分がナイフで切り刻まれるような痛みが襲った。足は使いものにならなかったから歩くことなどとても考えられない。だから何もすることはなかった。

そのとき妻は

入院三日目に末娘が休暇をとって横浜から飛んできてくれたときには、思わず娘に取りすがってしまいました。それまでの緊張の糸がぶつんと切れたのでしよう。「智子ありがとう」と言ったり泣きぐずれてしまったのです。

娘が母親の胸にすがって泣く話がよく聞きますが、親が子の胸でとは……夫は娘の顔を見るとうれしそうに、口を動かすのですが、私たちには聞き取れません。あとで本人に聞くと、「パパはだいじょうぶだよ」と言ったのだそうです。

こんな父親の姿を見て、娘も相当ショックを受けたことと思うのですが、「マヒなんて訓練次第で治るのよ」と気丈にも父親を励ましてくれます。このときほんとうに励まされたのは夫より私だったかもしれませぬ。

病状が安定し、主治医の先生から、「リハビリは男子一生の仕事」と言われ、友人から、「リハビリはできるだけ早く始めなさい。寝ている間からでも手足を動かさないと、動かなくなってしまう」と教えられると、まだベッドに横たわったままの夫にかわり、私がいまず「女子一生の仕事」と思わなければと自分を励ましました。

ところが、夫の手足を私が動かそうとすると、「痛い！ 痛い！」と言っ

ていやがります。訓練士の方は一日にほんの少し手足を動かしてくるだけ、「こんなことでもいいのか」とひとりで焦りを感じていました。

それでもやっと起立訓練が始まり、少しずつ回復が望めるようになった矢先、肝臓障害を起こして「絶対安静」の宣告。夫の失望がいちばん大きかったのかもしれませんが、今だから正直に言えば、私自身が立ち直れない気持ちでした。「これで夫はほんとうにだめになり、車椅子の人生になるのか」と思いました。

夫の前はなんとかつくろって病院を出、地下鉄に乗ると、涙があふれて抑えきれません。他人に涙を見られたくないと本を読むふりをして顔を隠していました。家に着くと声を上げて泣いてしまいました。

私が回復を焦るあまり、リハビリを強要しすぎたのではなかったかと、自分を責める気持ちもわいてきて、ただただ涙を流し続けていたのです。

その後、絶対安静が解除されたとき、夫は筋肉が全くなかったのを知って杖で布団をたたきながら泣きましたが、私にはもういっしょに流す涙はかれ果てていました。夫の涙にはいろいろな思いがあったことでしょうが、私はただ興奮の収まるのを待ち、静かに背中をさすっていました。

このとき、ほんとうに、「これからリハビリは一生続く。私も一生つきあ

っていこう」という心構えができたように思います。それまでも何度か同じような決心をしてきましたが、まだまだ本物ではなかったのですね。それからは周囲の人たちから、「奥さまが明るくてよかった」、「安心した」などと言われましたが、「私が明るくふるまわなければ、わが家はだめになってしまうんです」と心の中でつぶやいていました。とはいえ、「いつまでつづけられるのか」自信はありませんでした。



元気だったころ、珍しく夫婦で函館大沼公園へ。当時はよく食べ、よく飲んでいて、90キロ近くあった(昭和59年)。